



君は被災地を見たか!?

平成28年度

# 日本災害医療実地研修

Japan disaster medical hands-on training

2016.11.16~17



岩手医科大学

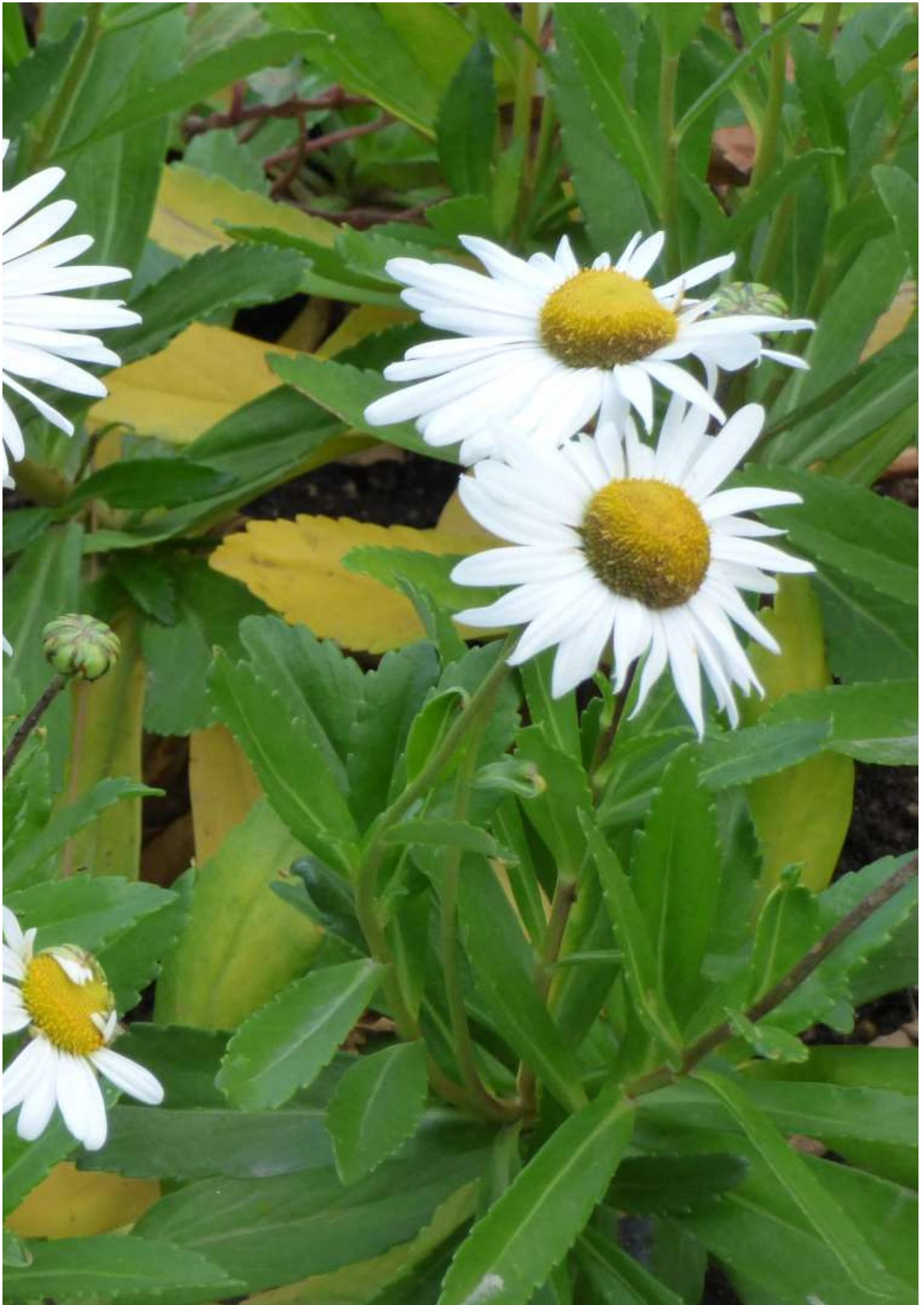
災害時地域医療支援教育センター

Center for research and training on community health services during disaster

## INDEX

ご挨拶	2
実施要領	2
研修プログラム	2
研修マップ	3
受講者名簿	5
講義の様子	6
机上シミュレーションの様子	7
実習の様子	8
被災地を知る	14
研修を終えての感想	18
アンケート集計結果	21
平成27年度日本災害医療実地研修を終えて	25
スタッフ名簿	25







日本災害医療実地研修に全国からお集まりいただきありがとうございます。岩手医科大学では平成25年度より毎年1回、全国の臨床研修医・大学院生を対象とした災害医療の研修を企画させていただいておりまして、今回で第4回の開催となりました。今回も北は北海道、南は沖縄とまさしく全国から28名の先生方にご参加いただき本当にうれしく思っております。感謝申し上げます。

東日本大震災の発災から5年半の月日が経過しました。その後も非常に多くの災害が発生しており、今年だけでも熊本地震や台風10号による岩手県沿岸部の豪雨災害、鳥取地震など、局地災害ながら非常に大きな被害を発生させた災害が複数発災しております。

この研修は、東日本大震災が発災した時の様々な思いを風化させないということ思いと、日本中で頻発する局地災害、今後近い将来必ず起きるであろう大規模災害に対して皆さんのような若い世代の医療人の方々に実践としての災害医療を学んでいただきたいと考え開催いたしております。今回は災害医療に関するエキスパートの先生方に多数お集まりいただき、講演をしていただくことになっております。また、実際に東日本大震災で被災されながらも、被災地にて復興に取り組んでこられた方々を講師としてお招きし、貴重な体験談をお聞きする予定です。

2日間のかかなりタイトなスケジュールですが、充実した研修内容になっておりますので、しっかりと災害医療について学んでいただければと思います。

岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター長  
救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授 眞瀬智彦

## 実施要領

### 1. 目的

平成23年3月11日に発生した東日本大震災・津波の被災地である岩手県沿岸部を訪れ、当時の対応や現在の状況を実際に見聞きし、臨床研修医や大学院生の立場から災害医療に対する考え方を学ぶ。

また、災害医学概論や机上シミュレーション等を通して災害医療に関する基礎知識を習得し、災害時に対応できる医療人の育成を目指す。

### 2. 開催日と開催場所

平成28年11月16日(水) 12:20~18:30 岩手医科大学矢巾キャンパス  
災害時地域医療支援教育センター  
11月17日(金) 7:30~16:20 岩手県沿岸部(釜石市、大槌町)

### 3. 研修対象と受講定員

全国の臨床研修医および医学系大学院生 30名

### 4. 研修内容

#### ■1日目：11月16日(水)

~12:20 受付  
12:25~ 【講義】災害医療ほか  
【実習】机上シミュレーション、トリアージ訓練、情報伝達訓練  
がれきの下の医療

#### ■2日目：12月5日(土)

7:30~ 【被災地を知る】被災した地域を見学し、当時の経験や現在の状況を伺いながら意見交換を行う。  
16:20 盛岡駅到着(全研修終了、解散)

### 5. 参加費

無料 但し、下記の費用は自己負担とする。

- ◆勤務地⇄岩手医科大学災害時地域医療支援教育センターの交通費及び宿泊費
- ◆懇親会費(1日目に予定)
- ◆2日目の昼食代

### 6. 問い合わせ先

岩手医科大学矢巾キャンパス 災害時地域医療支援教育センター事務局

住所：〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田2-1-1

電話番号：019-651-5111(内線 5563、5564)

FAX番号：019-611-0876

E-Mailアドレス：saigai@j.iwate-med.ac.jp

## 研修プログラム

### ■1日目

12:00~12:20	会場受付
12:20~12:25	開会の挨拶
12:25~12:50	講義   東日本大震災への医療対応(急性期~) 講師   岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授 眞瀬 智彦
12:50~13:05	被災地を知る   後期研修医の目線を感じた震災の状況と、その後の取り組み 講師   岩手医科大学産婦人科学講座 医師 千田 英之
13:05~14:35	机上シミュレーション   病院における災害発生時の対応と多数傷病者対応 講師   国立病院機構災害医療センター臨床研究部 医師 鶴和 美穂
14:45~15:00	実習   トランシーバー実習 講師   岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 助教 藤原 弘之
15:00~15:40	実習   トリアージ訓練 講師   岩手医科大学臨床遺伝学講座 講師 徳富 智明
15:40~18:30	実習   HUG(避難所運営ゲーム) 講師   国立病院機構災害医療センター臨床研究部 医師 鶴和 美穂 実習   がれきの下の医療 講師   岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授 眞瀬 智彦 実習   災害時の情報通信 講師   岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 助教 藤原 弘之
18:30~18:40	事務連絡
19:00~	懇親会

### ■2日目

7:15~7:30	受付(盛岡駅西口バスターミナル)
7:30~9:50	移動
9:50~10:50	被災地を知る   講師   独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長 土肥 守 被災地を知る   講師   岩手県立釜石病院 看護師長 坪井 忠和
10:50~11:20	移動   国立釜石病院→大槌町
11:20~11:50	バスの車窓より   旧大槌町役場、岩手県立大槌病院跡地、岩手県立大槌高等学校
11:50~13:05	被災地を知る   講師   岩手医科大学臨床遺伝学講座 講師 徳富 智明 被災地を知る   講師   三陸花ホテルはまぎく 総支配人 立花 和夫
13:05~16:20	移動   大槌町→釜石市→盛岡市
16:20	盛岡駅到着 解散







氏名		所属・職名	都道府県
伊藤 仁人	イトウ マサト	沖縄協同病院	沖縄県
江副 優彦	エソエ マサヒコ	佐賀県医療センター好生館	佐賀県
大崎 佑一郎	オオサキ ユウイチロウ	九州大学臨床研修センター	福岡県
大津 瑛裕	オオツ アキヒロ	岩手県立宮古病院	岩手県
岡山 允彦	オカヤマ マサヒコ	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	石川県
奥田 丈士	オクダ タケシ	金沢市立病院	石川県
落 裕之	オチ ヒロユキ	岩手医科大学附属病院	岩手県
小野寺 謙	オノデラ ケン	岩手県立中部病院	岩手県
酒井 千鶴	サカイ チツル	獨協医科大学病院	栃木県
佐藤 英臣	サトウ ヒデオミ	岩手医科大学附属病院	岩手県
宍戸 宏行	シシド ヒロユキ	那須赤十字病院	栃木県
菅原 沙織	スガワラ サオリ	獨協医科大学病院	栃木県
鈴木 聡志	スズキ サトシ	岩手県立中部病院	岩手県
武内 美咲	タクウチ ミサキ	千葉県済生会習志野病院	千葉県
張 賀冕	チャン フーミン	十和田市立中央病院	青森県
津田 圭介	ツダ ケイスケ	岩手医科大学附属病院	岩手県
中島 孝輔	ナカシマ コウスケ	佐賀県医療センター好生館	佐賀県
中嶋 佑輔	ナカシマ ユウスケ	岩手県立中部病院	岩手県
仲田 カ次	ナカダ リキジ	あかびら市立病院	北海道
人見 晶	ヒトミ ショウ	岩手県立宮古病院	岩手県
福田 悠人	フクダ ユウト	独立行政法人国立病院機構福山医療センター	広島県
藤原 進太郎	フジワラ シンタロウ	独立行政法人国立病院機構福山医療センター	広島県
古川 寛	フルカワ ヒロシ	佐賀県医療センター好生館	佐賀県
眞柄 達也	マガラ タツヤ	十和田市立中央病院	青森県
増嶋 香織	マスジマ カオリ	千葉県済生会習志野病院	千葉県
山井 悠吉	ヤマノイ ユウキチ	十和田市立中央病院	青森県
和田 俊太郎	ワダ シュンタロウ	岩手県立中部病院	岩手県
和田里 章悟	ワタリ ショウゴ	独立行政法人国立病院機構福山医療センター	広島県



東日本大震災への医療対応



岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長  
救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授

眞瀬 智彦

東日本大震災の発災時に、DMATを含む医療関係者がどのような活動を行ったのかについて、岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター センター長の眞瀬先生よりご説明頂きました。

東日本大震災では、大津波により岩手県沿岸部が壊滅的な被害を受けました。人口の1割近くの死者・行方不明者が発生した自治体がある中で、いくつかの病院はその機能のほとんどを失い、病院避難を余儀なくされました。

そのような状況の中、全国から参集したDMAT等の医療チームの支援を受けながら、被災地内の病院支援や病院避難、比較的被害の少なかった内陸地域への患者搬送等のミッションを行い、被災地内の医療の立て直しを図った様子をご説明いただきました。

また慢性期には災害医療コーディネーター体制を構築することで、長期化する避難生活を送る被災者の健康維持・管理を効率良く行うための仕組みづくりを行った事例などを紹介していただきました。

最後に東日本大震災で明らかになった課題と、今後起こりうる首都直下・南海・東南海トラフ地震の想定と、対策についてお話しいたしました。



被災地を知る | 後期研修医の目線で感じた震災の状況と、その後の取り組み



岩手医科大学産婦人科学講座 医師

千田 英之

東日本大震災発災時に、岩手県立宮古病院で後期研修医として勤務されていた千田先生に、当時の緊迫した状況の体験談を語っていただきました。

岩手県立宮古病院のある宮古市は、盛岡市の東側に位置し、人口6万5千人程度の沿岸部の中核都市です。病院自体は宮古市の高台にあるため、津波被害を受けることはありませんでしたが、ライフラインは途絶。また、病院のすぐ下にある漁港や市中心部は津波による浸水被害を受けました。

宮古市を含む4市町村で構成される宮古医療圏は、沿岸部の複数の地区が津波により浸水し、道路が寸断されたことで孤立状態となりました。また南に位置する山田町では火災が発生。岩手県立山田病院は津波により病院機能を失いました。

岩手県立宮古病院は宮古医療圏唯一の災害拠点病院でもあり、千田先生を含む病院スタッフは早々に災害対策本部を設置し、昼夜を問わず入院患者や外来患者の対応に追われました。その時の院内の様子や津波に襲われる市街地の様子などを写真も交えたスライドでご説明いただきました。



## 机上シミュレーション | 病院における災害発生時の初動と多数傷病者対応

国立病院機構災害医療センター臨床研究部 医師

鶴和 美穂

災害発生時に病院勤務していたと想定し、自分たちはどのように考え、行動するべきかについて、国立病院機構災害医療センターの鶴和先生にご説明頂きながら、机上シミュレーションを行いました。

最初にアイスブレイクを兼ねた自己紹介の後、病院職員として安全確認すべきことや災対本部としてどのような方針をもって対応に当たるべきか等についてディスカッションを行いました。

そのあと、多数の傷病者を病院で受け入れる体制を構築するシミュレーションとして、病院の見取り図を元に、エリア決めや、医師や看護師、事務員といった人員の配置、患者の動線等のレイアウトをグループ内でディスカッションし、地図内に配置しました。

それぞれのグループの考え方の違いにより、重症患者の処置に当たる人員の割り振り方や、トリアージエリアや現場指揮所のレイアウトの仕方、患者の動線などに差があり、シミュレーション終了後にはそれぞれのグループの配置と考え方を発表していただき、全体で共有しました。

実際に病院勤務中に災害が起きた時、病院としてはどのような対応を行い、臨床研修医である自分達にはどのような行動・判断が求められるのかについて、先ほどの千田先生の講義も踏まえより具体的なイメージが沸いたのではないでしょうか。



トランシーバー実習



岩手医科大学救急・災害・総合医学講座  
災害医学分野 助教

藤原 弘之

災害現場では普段使い慣れた携帯電話などの通信ツールが、停電などの理由により使えなくなるケースが散見されます。

混乱した状況下にある災害現場で活動する際には、正確な情報の取得・発信が非常に重要となります。

ここでは通信ツールの一つとして、トランシーバーを取り上げ、特徴と使用方法を説明するとともに、実際に機器に触れ使用することでトランシーバーがどのようなものを体験していただきました。



トリアージ訓練



岩手医科大学臨床遺伝学科 講師

徳富 智明

医療資源と患者の不均衡が生じた状況で、速やかに診療と搬送を行うためには、医療資源の分配順位、すなわち治療の順位を付けたトリアージ区分に患者を迅速に分類するトリアージを行う必要があります。

START法とPAT法のトリアージ方法についての説明に加え、実際にトリアージタグを記載する練習と、受講者がトリアージする側と模擬患者側に分かれ、交代しながら実際にトリアージを行う体験実習を行いました。

START法のトリアージでは、30秒以内に判断しなければならぬ時間的な余裕の無さに、最初の内は戸惑う受講者の皆さんでした。



HUG（避難所運営ゲーム）

国立病院機構災害医療センター臨床研究部 医師  
鶴和 美穂

東日本大震災では、長期化する避難所生活における被災者の健康管理が課題としてクローズアップされ、感染症の抑制のための公衆衛生の重要性や静脈血栓塞栓症（エコノミークラス症候群）の多発、慢性疾患への対応、要介護者等の災害弱者への対応、心理社会面への考慮等々さまざまな問題が表面化しました。

避難所の管理・運営は基本自治体が主導で行いますが、医療関係者として災害時の避難所の管理・運営がどのようなものなのかを理解しておくことも重要です。

ここでは、静岡県が開発したHUG（避難所運営ゲーム）を用いた避難所運営のシミュレーションを行いました。グループ毎に小学校の校舎や体育館の地図の上に、続々と押し寄せてくる様々な事情を抱えた被災者のカードをディスカッションしながら配置。また避難所で起こる炊き出し場の設定や仮設トイレの設置、避難している方からのクレーム対応や報道関係者への対応などといった様々な出来事に、避難所の運営側としてどのように対応していくかを疑似体験しました。



災害時の情報通信

岩手医科大学救急・災害・総合医学講座  
災害医学分野 助教

藤原 弘之

災害時に有効な情報通信ツールとして衛星電話と広域災害救急医療情報システム（EMIS）について、岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野助教の藤原先生にご説明頂きました。

東日本大震災のような大規模災害や、熊本地震、岩手県岩泉町の台風10号による豪雨災害のような局地災害においても、発災直後は通信インフラが機能せず、固定電話・携帯電話は使用できないか、かなりの制限がかかる状態となっていました。このような状況下では外部と通信する手段として衛星電話がほぼ唯一の手段となります。

ここでは衛星電話の実物をお見せし、操作方法などの説明を行いました。

また、情報共有のツールとして厚生労働省が運用している広域災害救急医療情報システム（EMIS）について、どのようなシステムなのか概要を説明するとともに、実際に操作画面をお見せして、災害時にどのような情報を入力し、共有するかを実演していただきました。



がれきの下の医療



岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長  
救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授

眞瀬 智彦

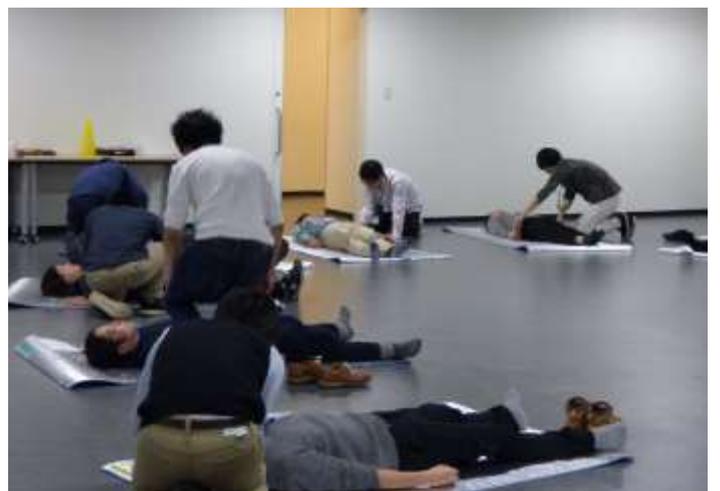
がれきの下の医療（Confined Space Medicine）では、近隣の駅近くで電車が脱線転覆し沿線の民家に車両が突っ込んでしまったという想定で、建物の倒壊に巻き込まれ閉じ込められた要救助者に対して、消防隊の救助活動中の状態から医療活動を開始するシミュレーションを、当センターのシミュレーション施設を用いて疑似体験していただきました。

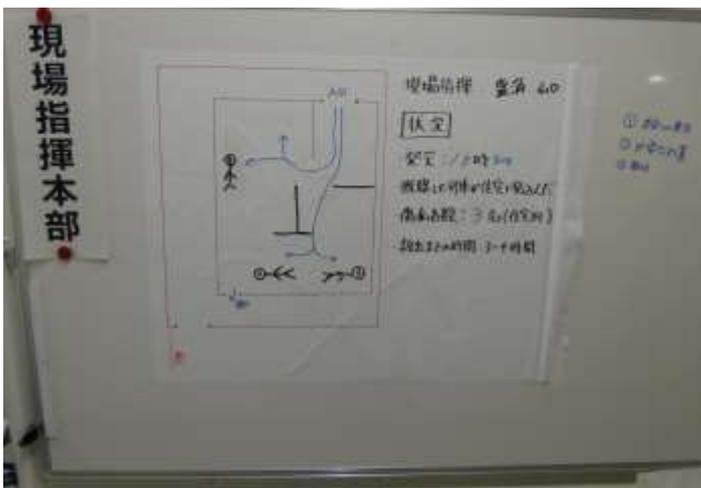
眞瀬先生によるブリーフィングの後、装備を整え対策本部で現場医療班のリーダーと接触、その後現場本部で消防から災害現場の状況確認をし、がれきの中の患者に接触しました。

平時には身に着ける事のないヘルメットや肘当て膝当てをし、体を屈めながらヘッドライトで患者を診療することが、普段何気なく行っている診療行為でさえ難しくしてしまうということを、身をもって体験していただけたかと思います。

その後消防からの退避指示を受け、安全を考慮し現場から緊急退避する際、残される患者に対してどのように声替えをするかなど、より実災害現場に近い形でのシミュレーションを行えたかと思います。









### 被災地を知る | 大災害時に一般医療機関並びに一般医師はどう行動すべきか

独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長

土肥 守

国立病院機構釜石病院院長の土肥先生より東日本大震災発災から現在に至るまでの体験、取組などをご紹介いただきました。

国立病院機構釜石病院は釜石市街地から山側に少し入った谷間に位置し、慢性期主体の障害者病棟と重症心身障害児者病棟をもった病院です。東日本大震災の時は、津波被害は受けませんでした。ライフラインは途絶。電話や携帯電話などの通信機器も使用不可となり、一時孤立状態となりました。病院スタッフも自宅が被災されたり、道路が寸断され出勤できない状態となりました。

そのような状況下で自院の医療体制の維持と傷病者の受け入れを行ったり、釜石医療圏の医療関係者、行政、消防・警察・自衛隊などと連携し、災害対応をしながら、外部から支援にやってくるDMATや医療救護班の受け入れをし、医療圏の立て直しを図ったなど、非常にリアルな体験談をお話いただきました。



### 被災地を知る | 東日本大震災時の医療機関の対応/現在の被災地

岩手県立釜石病院 看護師長

坪井 忠和

岩手県立釜石病院看護師長の坪井さんに、東日本大震災発災当時の状況についてご紹介いただきました。

岩手県立釜石病院は釜石医療圏唯一の災害拠点病院で、釜石市街地に位置しますが津波被害はありませんでした。しかし、本部棟が耐震強化工事を行う直前で被災し、倒壊の恐れがあるということで、手術室、放射線を含んだ246床が使用不可となり、一時屋外の駐車場へ入院患者を院外退避。その後無事だった病棟の空きスペースにマットを敷き廊下や待合室を臨時的病床として活用するなど、野戦病院さながらの状態でした。

釜石医療圏では釜石市の北隣の大槌町が人口の1割弱を死者・行方不明者が占め、医療機関（1病院5診療所が全て壊滅）や行政機関が壊滅するという甚大な被害を被る状況に陥っていました。県立釜石病院は災害拠点病院として釜石医療圏全体の医療を支える役目も負っており、自院の維持に加え、被災した他の医療施設のフォロー、医療圏全体のコントロール、外部から支援にやってくるDMAT、医療救護班の受け入れ拠点としての役割も果たす必要があり、坪井さんをはじめとする病院スタッフの当時の対応状況や震災時に被災地で起きていた状況などの体験談をご紹介いただきました。







岩手医科大学臨床遺伝学科 講師

## 徳富 智明

岩手医科大学臨床遺伝学科講師の徳富先生は、東日本大震災発災時自衛隊の医務官として宮古市周辺地域の災害派遣活動に従事されており、その当時の医療支援活動について体験談をお話いただきました。

津波被害の甚大だった東北地方太平洋沿岸地域には、日本国内から複数の自衛隊の部隊が早期から展開し、長期間にわたって災害救助活動を行いました。

自衛隊の医務官としての活動は、隊員の健康状態の維持・監視、活動地域の医療・衛生支援体制の構築・維持など多岐にわたります。長期間活動するためには部隊として、個々の隊員のメンタルも含めた健康管理、交代・休養も含めた人員のサイクルを効率良く回すことが必須であり、実際に宮古市周辺に展開していた部隊の状況なども合わせてご説明頂きました。



三陸花ホテルはまぎく 総支配人

## 立花 和夫

2日目の昼食を頂いた三陸花ホテルはまぎく総支配人の立花さんより東日本大震災の発災当初の状況と、復興しホテルを再開するまでの体験談をお話いただきました。

三陸花ホテルはまぎくは震災前、浪板観光ホテルとして営業していました。浪板海岸に面したホテルは15mにも及ぶ大津波の直撃を受け地下部分も含み3フロアが浸水、宿泊客は全て避難し無事でしたが、社長や若女将を含む従業員数名は館内に人が残っていないかを最後まで確認しているうちに津波にのまれ、行方不明となりました。

がれきが散乱し、主要なスタッフが亡くなったり行方不明となった壊滅的な状況から、少しずつ少しずつホテル再開に向けて歩まれたお話や、ホテル名をあらたに三陸花ホテルはまぎくとされた由来などについてもお話いただきました。

ホテルのロビーの先にある浪板海岸に面したテラスには、はまぎくの花壇があり、盛りは過ぎてしまいましたが、数輪はまぎくの花が咲き残っていました。花言葉の「逆境に立ち向かう」の通り、震災を乗り越えホテルを再開し、またこれから地域の復興を推し進めていこうとしている被災地の皆さんの姿を見ることができました。



### 古川 寛 佐賀県医療センター好生館

東北に来るのは初めてであり、震災の時もテレビやネットで情報を得ることはできたが、自分に関わることとしての実感はあまりなかった。今日、被災した場所を自分の目で見て、当時の状況を知る関係者の方々から話を聞くことができ、臨場感が湧いてよい経験であった。後輩たちにもお勧めしたい。

### 福田 悠人 独立行政法人国立病院機構福山医療センター

通常の病院業務で学ぶことのできない分野に触れることができ、大変有意義な時間だったと思います。また、5年経った今の被災地の状況、被災した人のお気持ちを聞いて聞くことができたのは大変貴重な経験でした。

今後も日本に住み、医師として働いていく以上、地震を含めた災害にあふ確率、またどこかで起こる確率は常についてまわると思うので、今回のことは災害医療の導入としてすごくよい機会だったと思います。ありがとうございました。

### 和田里 章悟 独立行政法人国立病院機構福山医療センター

若手で、被災地で起きたこと、起きてから今までのこと、その土地に行き、その土地の人から話を聞くことができた。言葉ではうまく表現できませんが、大きな経験となりました。医療人としてだけではなく、災害に、被災者に関わることができるのだと感じました。これからの医者的人生で大きな目標がひとつ増えました。精進します。

### 藤原 進太郎 独立行政法人国立病院機構福山医療センター

中四国で今まで生きて来た私としては、災害は少なく、身近なものとは言えませんでした。3.11の時も、やはり「日本で大変なことが起こってる」程度の認識だったのだと反省しました。

今回の研修では、災害時の医療を基本的な知識から、様々な実習を通して楽しく、また実践的に学べました。

さらに2日目の被災地訪問では、実際に被災された方々の悲痛な経験、リアルな経験を聞くことができました。以上の経験を是非持ち帰って、活用したいと思います。ありがとうございました。

### 山井 悠吉 十和田市立中央病院

広い更地が記憶に残りました。

### 眞柄 達也 十和田市立中央病院

研修を通して改めて自然災害の恐ろしさと、災害医療の難しさを知りました。

特に「がれきの下の医療」では限られた時間と資源で適切な評価と治療を行わなければならない、普段から訓練を行っておかないと、いざという時に聞えないと実感しました。

大規模災害は必ず起こるものと銘記し、今後の研修に活かしていきたいと思えます。

大変勉強になる研修でした。ありがとうございました。

### 張 賀冕 十和田市立中央病院

今回初めて参加しました。学生の頃は授業があってもあまり頭に入ってこなかったのを覚えています。この研修では、講演をはじめ、実際に現場に入ってどのように本部と連絡をとるのか、傷病者にどのように声をかけ、トリアージし、その場でできる治療を選択するのか体験できました。何もできない自分を知ることができただけでも良かったと思っています。今後必ず災害に携わることになると思います。その時に少しでも役に立てられたら、そう感じる事ができました。

### 菅原 沙織 獨協医科大学病院

今回、2日間にわたって災害医療の実地研修に参加させて頂きました。

私の実家は宮城県にあります。平成23年3月11日、当時私は大学（栃木県）にいて、直接被害にはあいませんでしたが、宮城にいる家族や友人とはなかなか連絡がつかず、ただ被害状況をテレビで知ることしかできませんでした。そんなことを思い出しながら、実地研修に参加して思ったことは、災害というものは、いつでも自分の身に起こ

りうる、そして起こった時には医師として、1人の人間として何をしなければならないかを常に考えて行動しなければいけないということでした。

医師になった今、学生の時と比べると、できること、しなければならないことがたくさんある。けれどもそれが正解かは分かりません。今回の実習でシミュレーションをただけでも何をしたらいいかとまどうことばかりでした。だからこそ、改めてマニュアルを確認したり、自分の病院ではどう対応しているのかを見直さなければと思えました。

この2日間はなかなか経験することはできない貴重な研修でした。今回の企画に携わった方々に改めて心より御礼申し上げます。そして、このような研修をこれからももっと多くの研修医の方に参加していただきたいと思います。

### 酒井 千鶴 獨協医科大学病院

今回、東日本大震災の現場、病院としての対応を実際に見て聞いて、実際の災害体験ができると聞き参加しました。出身が東海地方であり、いつか起こると言われている南海トラフ地震の時、何か活かさないか、医師として何をすべきか、訓練をしても、いざ災害が起きれば、自分も焦ってしまうし、病院としての機能、対応も知らないことがたくさんありました。

3.11発生時から病院の対策本部ができ、協力のDMATがくるまで患者の安全を守ること、防ぎえた死を減らすこと、通常の業務以上に多職種の人との連携が必要であることを学びました。実際に震災の被害を受けた病院や地域を見ることもでき、災害のシミュレーションもでき非常に有意義な2日目でした。

### 落 裕之 岩手医科大学附属病院

岩手にいたけど、実際に被災地を被災地として見に行ったのは初めてだったので、とても良い経験になりました。将来なにかしら災害に係わった仕事ができたらと思いました。

### 人見 晶 岩手県立宮古病院

実際の災害現場での活動の話や、がれきの下での救助の体験などを通じて災害医療の難しさを知ることが出来た。

当時、現場で対応をしていた方々の話を聞き、自分には何が出来るだろうかと考える良い機会になった。今回学んだことを災害時だけでなく、普段の医療にも役立たせ、後輩にも伝えていきたいと思う。

### 佐藤 英臣 岩手医科大学附属病院

2日間にわたり、このような研修に参加させていただき本当にありがとうございました。

1日目の研修では、研修であるにもかかわらず、自分がどう動けばよいのかとまどってしまうという経験をさせていただき、平日頃から頭のスミに震災の可能性を考えておかなければ、実際の現場では動けないと実感しました。

また、2日目は、3年前にも訪問していた釜石にまた行くことができ、復興の進行も確認でき、とても有意義な時間を過ごせました。また機会があればこの研修に参加させていただきたいと思えました。

### 穴戸 宏行 那須赤十字病院

今まで報道などで被災地の現状を知っているつもりではいたしましたが、実際に被災地を訪れたことはありませんでした。今回の研修で、実際に被災された方々のお話を伺ったり、被災地を訪問し災害の恐ろしさをあらためて実感しました。

「トリアージ訓練」や「がれきの下の医療」など、今回の研修で学んだことを忘れず、いつ起こるか分からない災害に対して備えたいと思えました。そして、実際に災害が起きた時は、医師としてしっかりと行動したいと思えます。

最後になりますが、今回の研修に関わったすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

**中島 孝輔 佐賀県医療センター好生館**

自分は生まれも育ちも九州で、東日本大震災の際もテレビの報道で見ることはあっても、どこか実感がないという状態で、とくに何も行動もせず、もどかしさを感じていました。4月、熊本で地震があり、一部ではありますが自分の研修先に被災された方が来られたましたが、どのように対処すればいいものかわからないまま、ただあたふたしていました。そんな中、研修センター長の先生から頂いたポスターの「君は被災地を見たか」というメッセージを見て、直接被災地を目にすれば何か変わるのではないかと思います、参加しました。

1日目には講義で災害の時の医療者の動き方や実習で勉強させてもらいました。がれきの下の実習では、頭が真っ白になってしまい、トレーニングを繰り返すことが大事だなと思いました。

2日目は被災地を巡ったり、当時のお話を様々な方から伺いました。生々しい話で、とてもショックでした。また、更地であったり、仮設住宅もあり、5年以上たってもまだまだ震災の影響を感じました。

今回の体験で、今後災害が起きた時に、少しでも誰かの役に立てるようにはなっただと思います。このような機会を作って下さった先生方、関係者の方々に感謝申し上げます。また、岩手、東北や熊本を含め災害の被害に遭われた地域の復興をお祈り申し上げます。また、今後新たな災害が起きた時に医療者として力になれたらと思います。

**仲田 力次 あかびら市立病院**

初期研修医1年目としては、まだ病棟業務も外来も指導医のチェックを頂けますので、自分が責任を背負う場面というのは基本的にありません。

それでもいざ災害が起これば、トリアージに初期対応に自分が第一に行動せねばならないと思います。2日間の講義・シミュレーション・視察を通して、自分がいち医師としてどう主体的に医療を行えるか、ひいては医師としての自覚を再確認する機会となりました。

長い医師人生で、いざ災害に遭遇した時、先輩方のように行動できる医師でありたいと思います！

**伊藤 仁人 沖縄協同病院**

この度は研修に参加し、貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

震災後からDMATの活動をテレビなどで拝見し災害医療を学びたいと思うようになりました。今回は研修医でも災害医療を学ぶ機会ということで参加させて頂きました。普段行っている診察、治療、手技がどのように災害医療に生きるのかが一番興味がありましたが、実際に自分ができるのかという不安がありました。震災の時、第一線で活躍された先生方のお話・実習はとても分かりやすかったです。机上シミュレーション、HUGでは災害時の人員配置、物資の配置、人の同線など考えディスカッションすることができました。最後にがれきの下の医療で1日学んできたことを実践するというカリキュラムでした。シミュレーションはとてもリアルでとても緊張し何もできませんでしたが、良い経験となりました。とにかく、ABCDをまず把握するところから始まり、がれきの下であるということのぞけば、いつも通り救急車対応で行っていることをやれば良いということを学べたので次回は完璧にやりたいです。

また、2日目の被災地を知るでは、1日目の講義をふまえた上で現地の医療者の体験談などを聞いてとてもリアルに災害について考えることができました。本当に貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。最後に・・・これが無料は本当にすごいです！！

**武内 美咲 千葉県済生会習志野病院**

発災当時、私はテレビから流れてくる津波の映像をただ眺めることしかできませんでした。あれから5年が経ち、初めて被災地を目にし一見キレイに整備されていましたが、そこにあった生活は取り戻せてはいなく、まだまだ復興の途中であり、そのスピードが遅いことを知りました。

自分自身も研修医になり、必ず来る震災・災害に向け、何を考えるか。発災直後から復興するまで医師として何が出来るか。今回の研修を通して、がれきの下やトランシーバーなどの体験から同年代の方々

とのグループワーク、臨場感ある実体験のお話など多方向からの刺激を感じると同時に、自分が出来る事を見つけることの難しさをあらためて痛感しました。まだまだ経験は浅いですが、これからの研修でそれらの答えを少しずつ見つけていけたらと思います。

眞瀬先生をはじめとする諸先生方、スタッフの皆様、今回は大変貴重な体験・研修となりました。あらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

**増嶋 香織 千葉県済生会習志野病院**

2日間という短い時間でしたが、大変多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。被災地の現状を見にいたり、災害シミュレーションを行ったりできるカリキュラムに興味を持ち、学びにいくというよりも楽しそうだからと参加を決めたのですが、内容は期待以上に充実しており、もっと学びたいと意欲を刺激されました。

1日目の「机上シミュレーション」や「HUG」では、災害が実際に起こった時のことを具体的に考えてこなかったことに気づかされ、混乱の中で、どう医療スタッフ、患者、被災者、物資を配置するか、生じるだろう問題点を解決していくかを考えることの難しさを知りました。

また、「がれきの下の医療」では、普段なら当然できる判断や手技ができず、災害が起こる前に訓練しなければ全く戦力にならないと思いました。

2日目は、様々な立場で東日本大震災を経験された方々からお話をうかがい、ニュース等の報道では知りえなかった現場の生々しい様子を知ることができました。被災後の患者の搬送やケアは私が想像していた以上の過酷さで、今回お話を聞くことができて本当に良かったと思います。

関東でも、いつ大震災が起こってもおかしくないとわれ続けているので、今回の研修を期に、災害時に自分がすべきこと、できることについて具体的に考えたいと思います。

この研修を企画して下さいました方をはじめ、関わって下さった皆様、大変お世話になりました。

**奥田 丈士 金沢市立病院**

3年前、ボランティアとして、2年前には観光で岩手に訪れていましたが、今回の研修会では医療者としての立場から東日本大震災を見るとどうなるかを紹介していただき、視点を変えることで学ぶことが沢山あると感じました。

**和田 俊太郎 岩手県立中部病院**

私は学生の頃とは違い、研修医という立場で改めて災害医療について考える機会が出来て、来て良かったと思いました。学生の頃は災害時、医療人として何が出来るか、病院の運営、地域での自分の役割を考えたことはなかったです。この会を通じて、災害時の自分の役割を考えることが出来、非常に有意義な時間になりました。この学んだこと、感じたことを忘れず、研修医期間だけでなく、医師として日頃から診療にあたりたいと思います。

**大津 瑛裕 岩手県立宮古病院**

災害時に病院が、DMATが、避難所が、それぞれどういう考えやシステムで動いているかが分かり、非常に有用な研修でした。また、内容が濃密で準備にとっても時間を割いて頂いていることが伝わりました。講師やスタッフの皆様にご心より感謝致します。

**鈴木 聡志 岩手県立中部病院**

私は、元々地球の起源や人類の起源を調べるために宇宙に進出する仕事をしたいと考えており、そのためのシステムの立ち上げや各方面との調整に興味がありました。自然科学の各分野につながる医療・医学を基盤にして実現したいと考えていますが、その中で災害医療は、関わる様々な職員の方との調整、減災のための仕組み作りなど、私の学びたいことにつながる部分が多くありました。また、東日本大震災で私自身も被害を受け、医師として役立てるようになりたいという思いも強く持っていました。

## 研修を終えての感想

この研修には2回目の参加となりましたが、昨年と大きく異なるカリキュラムであり大変勉強になりました。後輩たちにも進めていきたいと思います。

### 中嶋 佑輔 岩手県立中部病院

この2日間はとても充実したもので、貴重な体験を本当にありがとうございました。特に2日目の実際の被災地に訪れて津波被害の大きさや、現地の人のリアルなお話を聞かせて頂き、将来起こりうるであろう災害への準備がいかに大切なのかを痛感させられました。

医療人の1人として災害が生じた場合に、どう行動するかを考える機会となり、今後の臨床現場において、実習で得たものを活かしていきたいと考えています。

### 小野寺 謙 岩手県立中部病院

岩手県出身でありながら、震災以降沿岸の被災地に行くことをひかえていました。沿岸が地元ではありませんが、被災地を見ることを避けている自分がいました。

今回の研修の「君は被災地を見たか」というポスターを見て、沿岸部に行く良い機会だと思い参加させていただきました。1日目は無線の使い方や「がれきの下の医療」など、災害医療のノウハウを勉強させていただきました。初めての体験ばかりで貴重な財産を得ることができました。今回の研修に参加して本当に良かったと思います。ありがとうございました。

### 江副 優彦 佐賀県医療センター好生館

今年4月に熊本で地震が起こり、その際、救急科をローテートしていて地震に巻き込まれた患者さんを見てきて、いつ自分の身に災害がふりかかり、その時自分に何ができるのか考えるいい機会になると考えこの研修に参加させて頂きました。

今回の研修ではまず災害がおこった際に自分がすべきことを明確にレクチャーして頂きました。また、医師としての心構えも得ることができたと思います。

がれきの下の医療体験では何をすべきか考えがまとまらず、何もすることができませんでした。実際、体験してみている間に現場で冷静に活動することが困難に気づけたのはいい機会になったと思います。

また、津波におそわれた地域を訪れて、現地のお話を聞いたり、現地を見たりできたのはとても心に響くものがあり、復興が進んでいないことを再認識できました。自分の考えを改めさせられました。

数多くの有意義な経験をさせて頂きました。今回この研修に参加してよかったと心から感じます。ありがとうございました。

### 大崎 佑一郎 九州大学病院

いままで、災害医療について学ぶ機会はそれほどなかったのですが、今回参加させていただいて色々学ぶことができたと思います。災害医療の理論等の座学から、トランシーバー実習、HUG、トリアージ訓練等の実習もあり、飽きがなく楽しんで学ぶことができました。特に「がれきの下の医療」では、実際に防護服を着て、災害現場を模したところで、医療活動を行う現場を体験できた事は特に楽しかったです。自分達が実際に行くことはないですが、現場の雰囲気味わうことで、活動している方々の大変さを微力ながら理解できたように思います。

また、2日目には、実際の被害地域に行くことで、被災者の方々、



そして医療者の方々のお話を聞いて非常に参考になることも多かったです。

学生の時に、震災ボランティアをさせてもらった経験があり、今回は医療者という違った立場で何ができるのか考えるきっかけとなりました。自分の地元の宮崎県は災害も多く、将来、南海トラフ沖地震で津波襲来が予想されています。今回学んだ知識を生かし、診療に役立てていきたいです。

### 津田圭介 岩手医科大学附属病院

私は、被災直後に身元不明死体の確認作業のお手伝いをさせて頂く機会があり、釜石・大槌に行きました。あの時の凄惨な街の光景と何も出来ない己の無力さに打ちのめされたこと、そしてそれらすべてをあざ笑うかの如く皮肉にも美しく咲いていた桜はいまだに自分の中では忘れることが出来ない印象深いものでした。以降、次に震災が来たときは今度こそは自分が動けるようにならなくてはと考えておりましたが、先日の熊本震災の時も何も出来ず、ただただ現地の方々の無事を祈るのみでした。夏期休暇で熊本を訪れ、最大被害地である益城町にも立ち寄ってきました。いまの自分は無力であることを痛感するとともに、力を蓄えようと改めて感じました。それ故に、また災害医療を勉強し直したいと思い今年度も参加させて頂きました。驚いたことに、研修会の内容は昨年度との重複がほとんどない構成となっており、復習というより新しい学びの方が多く大変勉強になりました。準備して下さった真瀬教授はじめとする諸先生方、スタッフの皆様の熱意に敬服するとともに、貴重な場を設けて頂いたことに心から感謝致します。ありがとうございました。今回参加させて頂き、継続し学び続けることの大切さ、重要性を改めて感じました。次回は、残念ながら研修医ではないため、本研修会には参加できませんが、どんな形にせよ災害医療に携わり続けたいと考えております。そして本研修の素晴らしさと意義を後輩たちに伝え、災害医療マインドを持つ医療者が増えてくれる一助になればと思っています。

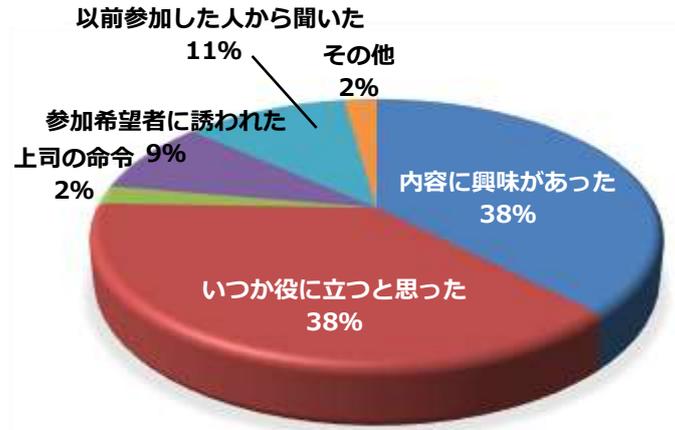
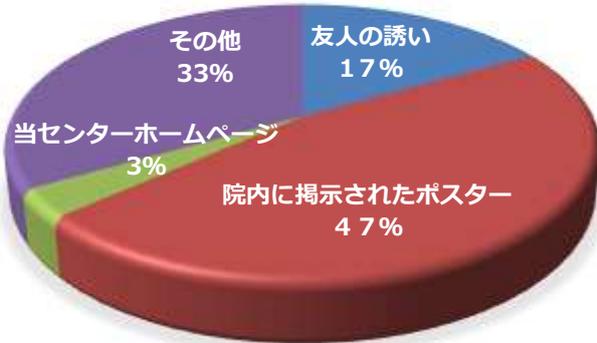
### 岡山 允彦 金沢医療センター

震災後初めて沿岸部を訪問し、ニュースでみる景色との違いに圧倒されました。被災者の生の声を聞くことで、一医療者としてこれから災害医療と少しでも向き合っていく必要があると感じました。いつ自分がいる場所で何が起きてもおかしくないのだという事実は忘れないように。今回の研修はとてもいい経験になりました。ありがとうございました。



【アンケート回答者数 28名】

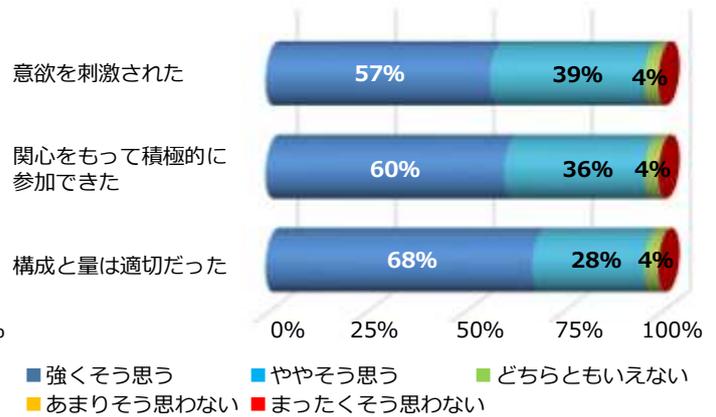
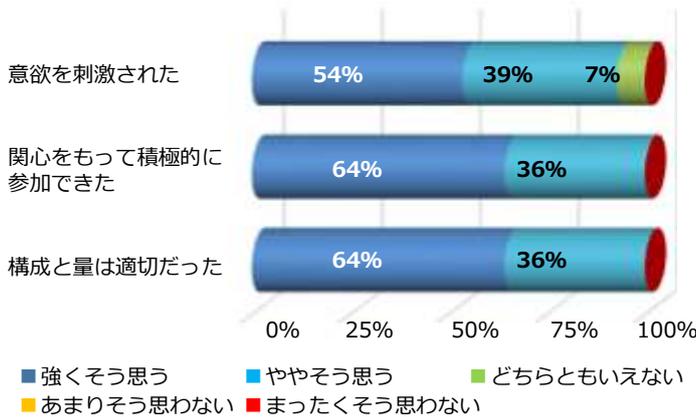
1. 今回の研修について、どのようにして知りましたか？ (複数回答可)      2. 受講した動機についてあてはまるものすべてに☑をしてください。(複数回答可)



3. 研修それぞれの感想について、以下の選択肢からお選びください。

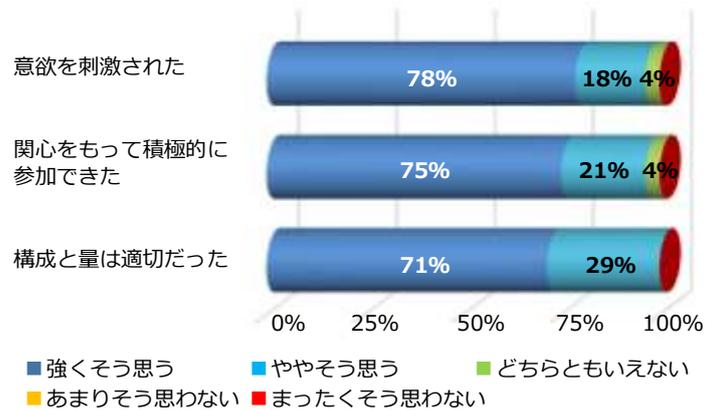
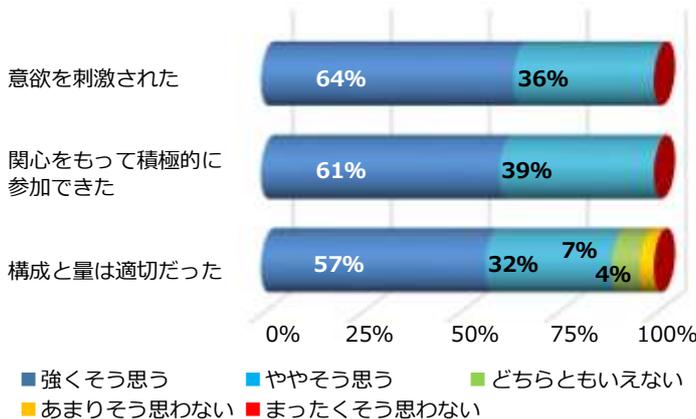
■ 講義 | 災害医療 (急性期)  
岩手医科大学救急・災害・総合医学講座  
災害医学分野 教授 眞瀬 智彦

■ 被災地を知る | 後期研修医の目線で感じた震災の状況と、その後の取り組み  
岩手医科大学産婦人科学講座 医師 千田 英之



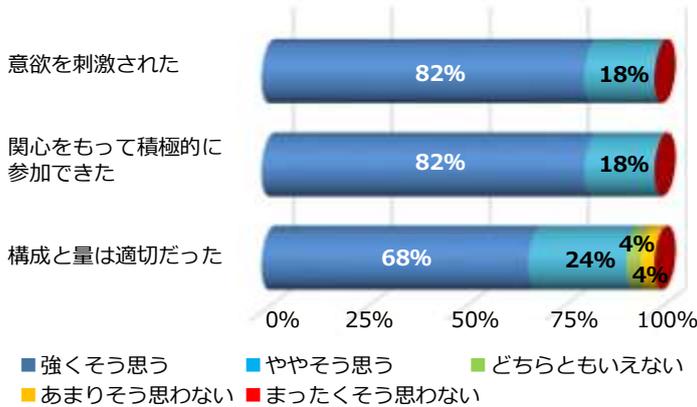
■ 机上シミュレーション | 病院における災害発生時の対応と多数傷病者対応  
国立病院機構 災害医療センター 臨床研究部  
医師 鶴和 美穂

■ 実習 | トランシーバー実習  
岩手医科大学救急・災害・総合・災害学講座  
災害医学分野 助教 藤原 弘之



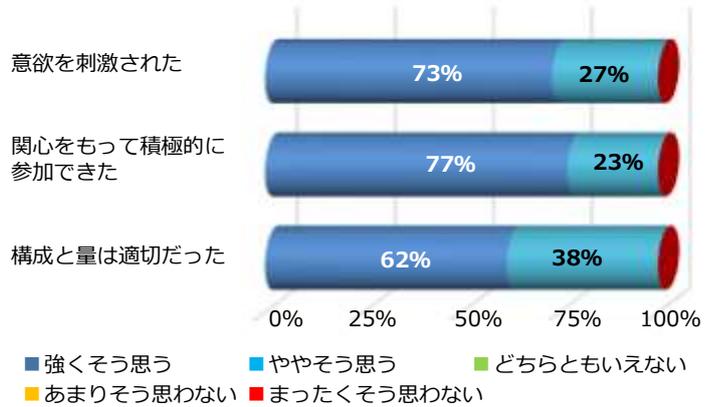
## ■ 実習 | トリアージ訓練

岩手医科大学臨床遺伝学科 講師 徳富 智明



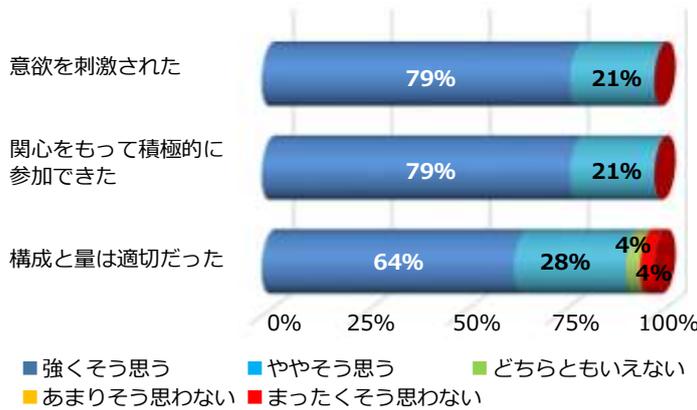
## ■ 実習 | HUG (避難所運営ゲーム)

国立病院機構災害医療センター 臨床研究部  
医師 鶴和 美穂



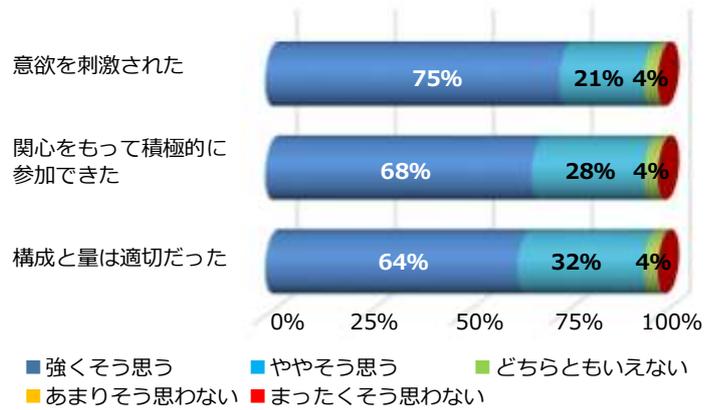
## ■ 実習 | がれきの下の医療

岩手医科大学救急・災害・総合医学講座  
災害医学分野 教授 眞瀬 智彦



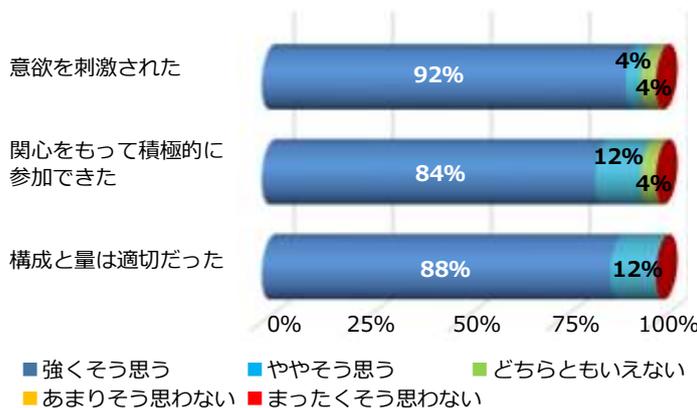
## ■ 実習 | 災害時の情報通信

岩手医科大学救急・災害・総合医学講座  
災害医学分野 助教 藤原 弘之



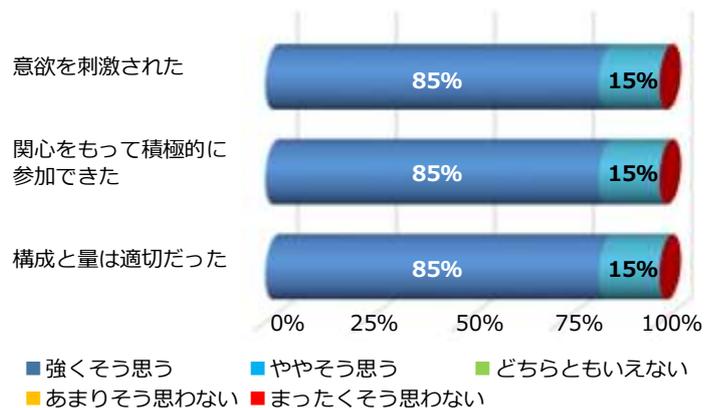
## ■ 被災地を知る | 大災害時に一般医療機関並びに一般医師はどう行動すべきか

独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長 土肥 守



## ■ 被災地を知る | 東日本大震災時の医療機関の対応 / 現在の被災地

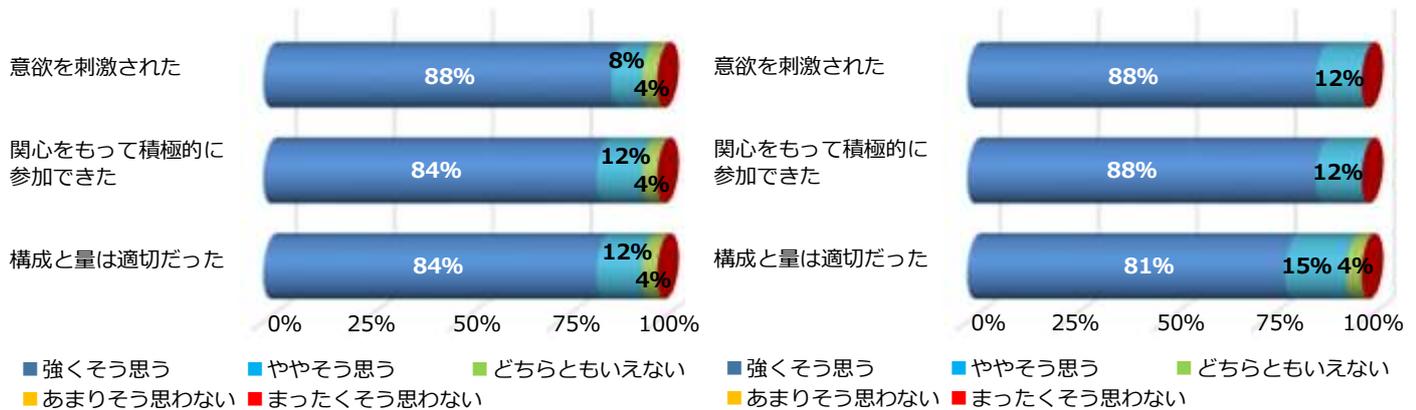
岩手県立釜石病院 看護師長 坪井 忠和





■ 被災地を知る | 自衛官としての医療支援活動経験  
岩手医科大学臨床遺伝学科 講師 徳富 智明

■ 被災地を知る | 東日本大震災をうけて  
三陸花ホテルはまぎく 総支配人 立花 和夫



### 1. 【研修1日目】改善してほしいことをご自由にご記入下さい。

- 普段使わない用語が多く、説明も特になかったため困った。
- 机の向きが講師の先生に対して横だったので聞き辛かったです。
- がれきの下の医療で、ルート確保などどこまでやる体なのか説明なく分かりませんでした。
- がれきの下の医療でのトランシーバーでの報告のタイミング等をもう少し詳しく説明していただけるとより分かりやすかったと思います。
- がれきの下 実習は1回目、後から失敗に気づいて悔しい思いをしたので、2回目やるチャンスがあるとよりトランシーバーや伝達の練習になったと思いました。
- がれきの下の医療のボリュームを増やして欲しい。
- がれきの下の医療に関して、どの席でどの防具をつければよいかぱっと分らなかつたです。その上で急かされても困りました。
- HUGの時は、少し量が多く感じたが、実際の内容を扱う上では、いいのかもしれないと思います。
- HUGは少し長かったので疲れました。
- 全体的にボリュームのある内容だった。
- 半日ではなく1日かけてやりたい内容だった。
- 非常に有意義な研修でした。もっと長い時間でもよかったです。
- 参加が早くなっても良いので、ゆとりのある時間設定の方が良かったです。
- 衛星電話を実際に使用する練習をしてみたいです。
- 改善点を強いて挙げれば、参加者（Task Force）として、研修医以外の職種も入った方がさらに活発かつ建設的になるかと思います。
- 初日に、盛岡駅から岩手医大までのバスくらいは出して欲しかった。

### 2. 【研修1日目】良かったことをご自由にご記入下さい。

- すべて初めて学ぶことばかりで、とても興味深く学ばせていただきました。2日目の視察も楽しみです。
- 災害医療の内容を少しでも知ることが出来て良かった。
- 体を動かしたり、頭を動かしたり、意欲をもって取り組むことができた。
- 災害医療の現場を短い時間だが疑似体験できて強く興味がわいた。災害医療専従医について話が聞けたとても良い経験になりました。
- 全て実践的で良かったです。災害医療について深く考えることができました。
- がれきの下の医療は大変勉強になり、いい経験であった。HUGも大変頭を使って勉強になった。
- トランシーバーやがれきの中の医療など今まで体験したことがなかったことが体験できた。災害医療に興味もてた。
- 普段できない研修ができてよかった。
- 講義の後に、実際に実習の形で実践できて良かった。
- 昨年に続いて参加しましたが、内容が変化していて大変興味深く勉強できました。
- がれきの下の研修は、初めての体験で刺激的でした。
- 災害医療に対して意欲が刺激され良かったです。
- 丁寧に準備して下さってありがとうございます。
- 実体験のお話を聞いたことが良かったです。実習も緊迫感があって、リアルな感じで良かったです。
- グループワークや実践で自分がいかに無知で、適切に動けないかを知れて良かった。
- 実習を含めた講義でイメージしながら研修することができた。がれきの下の医療体験ができて良かったです。
- 参加型の研修で、非常に勉強になりました。ありがとうございました！

### 3. 【研修2日目】改善してほしいことをご自由にご記入下さい。

- 東日本大震災の際に、実際に前線で仕事されていた方々の話を聞くことができた。その時間をもう少し長くして欲しい。
- 自衛隊と医師会、DMATの連携について、より具体的なエピソードも聞きたいと思いました。
- 市役所は数分でも降りてみたかったです。
- 移動が長い点です（が、ガイドさんや社内での学習で比較的気にならなかったです）。
- 朝早かった。
- ご飯が短かったことです。
- 昼食時間にもう少し余裕があるといいと思います。
- せっかく昼食が美味しかったのに、味わって食べる時間がなかったこと。

### 4. 【研修2日目】良かったことをご自由にご記入下さい。

- 現地を実際に見ることができたのは非常にいい経験になりました。まだ十分に復興が進んでいないことを再認識できた。
- 考えに考え抜いて頂いたスケジュールに、先生方、スタッフの方々の熱意を感じ、ただただ感服致します。ありがとうございました。
- 被災地に行くことで、より具体的に当時の状況を想像することができた。バスガイドさんのお話も楽しめました。
- 医療従事者以外の方からもお話を聞けて良かったです。
- リアルな話はすごく刺激になります。
- 体験談が生々しくて心に刺さりました。災害専門でなくてもできるアプローチの仕方を教えていただいて良かったです。
- 土肥先生のお話がとてもリアルに災害というものをリアルに知ることができ、自分でも実践できそうな自信が湧きました。全体を通してとても素晴らしい2日間でした。
- 現地の医療者の体験談、医療者でない方の体験談、どちらも聞けて良かったです。
- 実査に被災地を目の前にし、臨場感のあるお話も聞けて、とても貴重な時間となりました。
- 一日を通して、皆さんの臨場感のあるお話も聞けて、とても貴重な時間となりました。
- 災害医療に関して講義、実習を含めて短い時間の中、非常に充実した時間を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。
- 実際に被災地を見てくることができて、工事の進み具合も見ることができたので勉強になりました。
- 2日目は特にお話がおもしろかったです。



研修2日目に皆さんを釜石市・大槌町にお連れいただいた岩手県北バスさんは、東日本大震災の際にいわて花巻空港に全国から参集した300名を超えるDMATへの活動協力として、移動用・宿泊用大型バスの提供、職員宿泊施設を開放いただくなど、多大なご支援をいただいたという経緯があります。



## 平成28年度 日本災害医療実地研修を終えて

日本災害医療実地研修を終えて一言申し上げます。

今回の研修は12月の岩手県としては積雪もないとても穏やかな天候の中で開催することができ、また何事もなく無事に終了できたことに感謝申し上げます。

本研修は、東日本大震災の教訓から、今後の医療・医学を支えていくであろう全国の臨床研修医・医療系大学院生を対象としました。災害医療の基礎的な知識を習得し、東日本大震災の津波被災地へ赴き、そこでどのような規模の被害が発生したのか、どのような医療活動が行われたのかを、実際に被災され復興に携わってこられた方、地域の医療を支えるためにご尽力された方、災害全体を調整された方から直接お話を伺うことで、当時の様子を実感できたのではないかと思います。

皆さんは様々な思いで本研修に参加されたことと思いますが、災害医療に興味を持った者が集まり、意見を交わし、人間関係を築き上げることができたことは、非常に有意義であったと思います。この2日間で学んだこと、現在の被災地の様子を実際にその場に立ち感じていただいたことが、今後必ず起こり得る災害時に少しでも役に立つものであれば幸いです。行き届かないことが多々あったかとは思いますが、全国から多数のご参加を頂き、誠に感謝しております。

最後にご講演頂いた講師の皆様、また研修にご協力いただいた皆様に感謝申し上げますとともに、来年度も本研修を引き続き開催したいと考えておりますので、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

岩手医科大学 救急・災害・総合医学講座 災害医学分野 教授  
眞瀬 智彦

## スタッフ名簿

### 講師一覧

氏名	所属・職名
眞瀬 智彦	マセ トモヒコ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター長 兼 救急・災害・総合医学講座災害医学分野 教授
土肥 守	ドイ マモル 独立行政法人国立病院機構釜石病院 院長
千田 英之	チダ ヒデユキ 岩手医科大学産婦人科学講座 医師
鶴和 美穂	ツルワ ミホ 独立行政法人国立病院機構災害医療センター臨床研究部 医師
藤原 弘之	フジワラ ヒロユキ 岩手医科大学救急・災害・総合医学講座災害医学分野 助教
徳富 智明	トクトミ トモハル 岩手医科大学臨床遺伝学科 講師
坪井 忠和	ツボイ タダカズ 岩手県立釜石病院 看護師長
立花 和夫	タチバナ カズオ 三陸花ホテルはまぎく 総支配人

### スタッフ一覧

氏名	所属・職名
金子 拓	カネコ タク 岩手医科大学附属病院 看護師
北田 成沙	キタダ ナリサ 岩手医科大学附属病院 看護師
亀井 翔太	カメイ ショウタ 岩手医科大学医学部4学年(救急・災害・総合医学講座災害医学分野研究室配属中)
菅原 隆二郎	スガワラ リュウジロウ 岩手医科大学医学部4学年(救急・災害・総合医学講座災害医学分野研究室配属中)
山口 順之	ヤマグチ ヨシユキ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局 室長
山本 英子	ヤマモト エイコ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局
蒲澤 優	ガマサワ マサル 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局
奥野 史寛	オクノ フミヒコ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局
御堂地 愉里子	ミドウチ ユリコ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局
伊藤 友香子	イトウ ユカコ 岩手医科大学災害時地域医療支援教育センター事務局

## 平成28年度 日本災害医療実地研修 報告書

発行日 : 2017年1月30日

編集／著者 : 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター

発行所 : 岩手医科大学

〒020-8505 岩手県盛岡市内丸19-1

Tel.019-651-5111 (大代表)

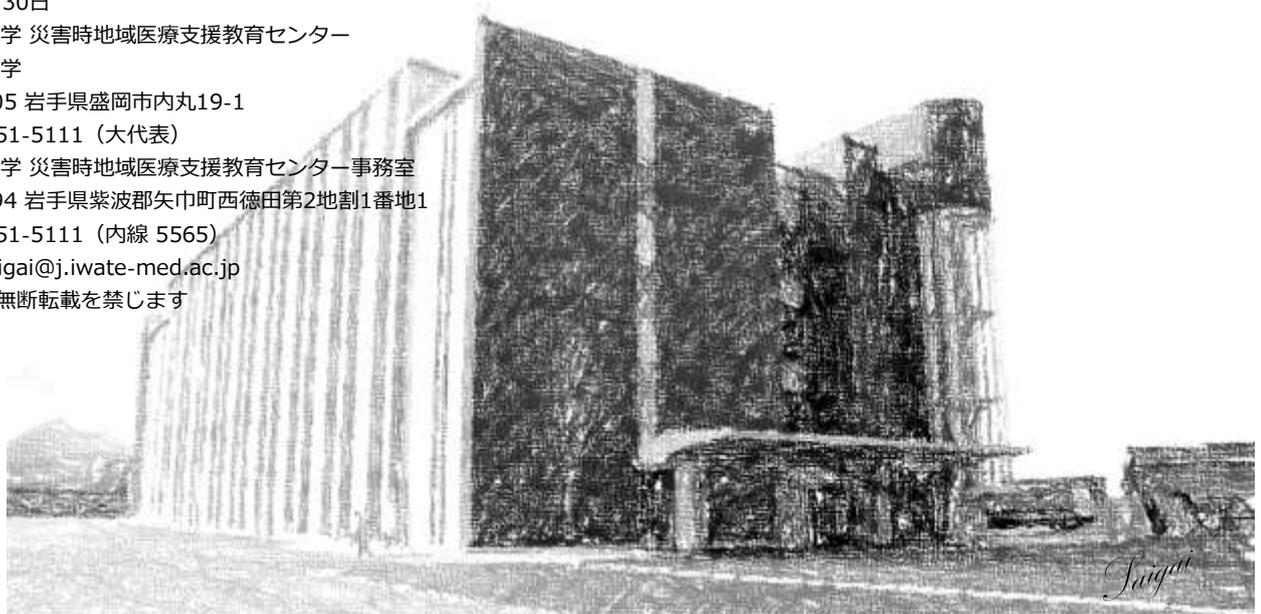
連絡先 : 岩手医科大学 災害時地域医療支援教育センター事務室

〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町西徳田第2地割1番地1

Tel.019-651-5111 (内線 5565)

E-mail. saigai@j.iwate-med.ac.jp

※無断転載を禁じます



*Saigai*